

## 当院における異物誤飲小児例に対する内視鏡による治療成績

那覇市立病院 外科<sup>1)</sup>, 内科<sup>2)</sup>

長濱正吉<sup>1)</sup>, 与那嶺圭輔<sup>2)</sup>, 城間裕子<sup>2)</sup>, 西澤万貴<sup>2)</sup>, 星野訓一<sup>2)</sup>, 馬淵仁志<sup>2)</sup>, 金城 讓<sup>2)</sup>, 宮里 賢<sup>2)</sup>, 豊見山良作<sup>2)</sup>, 仲地紀哉<sup>2)</sup>, 金城 泉<sup>1)</sup>, 宮里 浩<sup>1)</sup>, 友利寛文<sup>1)</sup>, 島尻博人<sup>2)</sup>, 山里将仁<sup>1)</sup>

### 要 旨

【はじめに】日本消化器内視鏡学会はハンドブックの中で消化管壁を損傷する可能性のあるもの、閉塞の可能性のあるもの、等には摘出術が必要だとしている。今回私たちは当院における小児異物誤飲例の内視鏡治療成績を検討した。【対象症例と検討項目】2009年4月から2014年12月までに異物誤飲で全麻下内視鏡異物摘出術が施行された25例を対象とした。男児14例・女児11例で生後11ヶ月から11歳まで（中央値3歳6ヶ月）であった。硬貨（CO群）14例（男児6例・女児8例）、ボタン電池（BU群）7例（男児5例・女児2例）、その他（E群）4例（男児3例・女児1例）の3群に分け、摘出時の異物の位置、診断方法、異物摘出術関連合併症、などを検討した。【結果】異物はCO群で食道（12例）、BU群で胃（6例）に多かった。診断方法は全例でレントゲンが施行され、CTがBU群2例、E群1例で追加された。入院期間の中央値は2日間であったが、BU群の1例で食道潰瘍のため6日間の入院を要した。異物摘出術関連合併症例はなかった。【まとめ】異物を誤飲した小児例は食道内の硬貨、胃内のボタン電池が多かった。治療関連合併症はなく安全に治療されていた。

**Key words:** 小児, 異物誤飲, 内視鏡治療

## 口腔内環境および清掃状態の評価票の作成

### ～簡便かつ有用な評価を目指して～

那覇市立病院 看護部歯科衛生士<sup>1)</sup>, 看護部<sup>2)</sup> 歯科口腔外科<sup>3)</sup>  
大城千代<sup>1)</sup>, 新垣美知枝<sup>1)</sup>, 米須美枝子<sup>1)</sup>, 喜納玲子<sup>1)</sup>, 稲嶺直子<sup>1)</sup>, 小橋川祐加<sup>1)</sup>  
藤本みゆき<sup>2)</sup>, 清水孝宏<sup>2)</sup>, 比嘉敬子<sup>2)</sup>, 津波古 判<sup>3)</sup>, 津波古京子<sup>3)</sup>, 仲盛健治<sup>3)</sup>

#### 要 旨

2014年7月に入院患者に対する歯科衛生士による口腔衛生管理の介入を始めた。積極的介入に際し、口腔内環境の客観的評価を確立することを目的に評価票を作成した。評価票作成にあたっては、簡便かつ短時間で評価可能となるように項目を設定した。評価項目はA) 口腔内環境, B) 口腔清掃の自立の程度, C) 口腔内の衛生状態, D) 乾燥の程度, E) 口臭の有無, の5群とした。

次に、作成した評価票を用いて内科疾患を主体とした患者の病棟での調査を行い、得られた結果を分析した。分析の結果、1) 「口腔清掃の自立度」と「うがいの自立度」が対応すること、2) 「歯槽部の衛生状態」と「舌の衛生状態」には乾燥の程度が関連すること、3) 緩和医療を行っている患者では、口腔乾燥が強く舌の衛生状態が不良なものが多くみられることが明らかとなった。

以上結果から、本評価票は、口腔清掃の自立度や原疾患の治療内容等で患者を層別化し、それぞれの患者層の口腔内環境や衛生状態を評価する際に有用と考えられた。

**Key words:** 評価票、口腔衛生管理、歯科衛生士、入院患者

## 入院患者の口腔内環境・衛生状態の評価

那覇市立病院 歯科口腔外科<sup>1)</sup>, 看護部<sup>2)</sup>, 看護部歯科衛生士<sup>3)</sup>  
仲盛健治<sup>1)</sup>, 津波古 判<sup>1)</sup>, 津波古京子<sup>1)</sup>, 藤本みゆき<sup>2)</sup>, 清水孝宏<sup>2)</sup>, 比嘉敬子<sup>2)</sup>  
西村智江<sup>2)</sup>, 照屋りつ子<sup>2)</sup>, 喜屋武 勝<sup>2)</sup>, 喜納玲子<sup>3)</sup>, 稲嶺直子<sup>3)</sup>, 小橋川祐加<sup>3)</sup>  
大城千代<sup>3)</sup>, 新垣美知枝<sup>3)</sup>, 米須美枝子<sup>3)</sup>

### 要 旨

当院の入院患者の口腔衛生管理の体系化を構築することを目的に、口腔内環境調査を実施した。2015年6月15日から8月26日まで、病棟ごとに1週間を基本とし、考案した評価票に基づいて口腔内環境調査を行った。

内科疾患の入院患者を主体とした病棟では、口腔衛生を自立して行うものの割合が低く、口腔衛生状態が不良なもの割合が高い傾向であった。一方、外科疾患の入院患者を主体とした病棟では、手術前後で口腔内環境が大きく変わることが特徴的であった。脳外科疾患の入院患者を主体とした病棟では、口腔清掃に介助を要する患者が多いにも関わらず、その口腔衛生状態は良好なものが多かった。全調査対象を一括して口臭を従属パラメータとしたlogistic解析を行った結果、口腔乾燥、口腔衛生状態と舌苔が優位な関連因子として算出された。

入院患者に対する効率的な口腔衛生管理を行う上で、評価者、被評価者ともに負担が少ない本調査を継続することは有用と思われた。

**Key words:** 口腔内環境調査, 口腔衛生状態, 入院患者

---

## C型バイトブロック (B-BOC™) の使用経験

那覇市立病院 集中治療室<sup>1)</sup> 4階西病棟<sup>2)</sup> 看護部<sup>3)</sup>

濱元盛将<sup>1)</sup>, 諸見里 勝<sup>1)</sup>, 里井陽介<sup>1)</sup>

平敷好史<sup>1)</sup>, 普天間 誠<sup>2)</sup>, 清水孝宏<sup>3)</sup>

---

### 要 旨

気管挿管は、呼吸不全・呼吸停止の他、何らかの呼吸障害を有する場合や全身管理が必要な場合の補助手段として広く行われている。バイトブロックは気管チューブ閉塞や歯牙による損傷予防で使用される。経口挿管の場合、筒型バイトブロックが通常使用されている。それらは口腔内の占有容積が大きく、患者に違和感や苦痛を与えるばかりではなく、患者の口腔内の観察が行いにくい。また、人工呼吸器関連肺炎 (VAP) のリスクファクターの1つに口腔内細菌の影響があり、これを予防するためにはオーラルケアは重要である。通常の筒型バイトブロックでは、口腔ケアに支障をきたす。一方、気管チューブに外挿するタイプのC型バイトブロック (B-BOC™) では、それらの問題点が改善され、当院でも2011年より導入している。今回、B-BOC™使用中の患者の気管チューブの先端位置が浅くなった事例が発生し、その原因究明を行った。その結果、固定位置が統一されていないことによるもの、咬合すること、細く形状が異なる固定テープを使用していたことがさらに関与していた。

---

**Key words** : 経口挿管, C型バイトブロック (B-BOC™), 固定テープ

# 尿素呼気試験の運用検討について

## ～内視鏡センターから検査室へ～

那覇市立病院 医療技術部 検査室

石垣宏枝, 伊禮孝子, 知念和美, 古内佐千子, 照屋 治, 真栄田百合子

---

### 要 旨

尿素呼気試験 (urea breath test ; 以下 UBT) は胃内の *Helicobacter pylori* の存在を確認する検査方法の一つであり, 非侵襲的で特異性が高く, 簡便であることから日本ヘリコバクター学会でも推奨されている。2013年2月に日本ヘリコバクター学会のガイドラインが改正され *H. pylori* 感染性胃炎も除菌の対象となった。このような背景から当院でも UBT の需要が高まり, 臨床側からの強い要望を受け, 検査室での運用を検討した。

2013年3月から検討を開始し, 2013年5月に検査室による運用を開始した。その結果, 検査件数は月10件程度から80件と増加し検査の予約待機は解消した。採血室と既存のベッドを活用し, 増員せずとも検査室の職員で応援体制をとり, 運用を実現できたことは診療支援に大きく貢献できたと考えられた。

---

**Key words :** *Helicobacter pylori*, 尿素呼気試験

---

## 当院透析室における B 型肝炎ワクチン接種プログラム

那覇市立病院 看護部

長嶺千賀子, 又吉慶, 平良美理香, 伊波るり, 喜屋武勝

---

### 要 旨

標準予防策は感染対策の基本であるが、透析施設においては標準予防策のみでは不十分であることが米国疾病予防管理センター (Centers for Disease Control and Prevention : CDC) によって指摘されている。

一般に、透析室では複数の患者が同時に血液の体外循環を行っており、患者は同一の大部屋でベッドや透析機器類、その他の空間を共有し透析時間を過ごしている。

そのため、血液媒介の感染リスクが高く、医療スタッフは感染が起きないように感染対策を行っていかねばならない。血液媒介感染症のなかでも B 型肝炎は、透析施設において最も注意をはらうべき感染症である。

B 型肝炎ワクチン接種で感染が予防できるが、透析患者では 3 回接種後の免疫獲得率が 64% と健常者の 94% より低く、いったん獲得後にも抗体消失する例がみられる<sup>3)</sup>。

当院透析室では HBV 感染対策の一環として 2006 年から維持透析患者への B 型肝炎ワクチン接種プログラムを開始した。2006 年～2015 年までの 10 年間 B 型肝炎ワクチンプログラムを実施し、接種の流れ、システムを構築することでスムーズにワクチン接種が行えるようになった。ワクチン接種の意義の説明を行う事でスタッフだけではなく、患者も血液媒介感染予防に対しての意識向上へと繋がったと考える。

---

**Key words:** B 型肝炎ワクチン, 陽転率, ブースター接種

## 治験の推進における病院内の体制整備について

那覇市立病院 治験管理室<sup>1)</sup>, 同 副室長<sup>2)</sup>, 同 室長<sup>3)</sup>  
川平可奈絵<sup>1)</sup>, 眞栄里昌代<sup>1)</sup>, 間仁田 守<sup>2)</sup>, 喜屋武幸男<sup>3)</sup>

### 要 旨

平成9年に「医薬品の臨床試験の実施の基準に関する省令」が厚労省より発令され、治験実施の体制整備を目的に、全国の各医療機関で治験管理室の設置が進められた。沖縄県内でも平成14年から、主だった医療機関において治験管理室の設置が開始された。

そのような中、当院では平成24年に治験管理室を開設した。当室を開設して2年後には当院で実施した治験の1つにおいて、症例登録数が全国1位となった。これは、院内の各部門間における円滑な協力体制により得られた結果だと考えられ、治験を実施することにより、この協力体制がさらに整備されたように思われる。しかし、現状では治験はまだ限られた診療科のみで実施されており、今後も治験を推進するために更なる業務展開が必要である。

一方で、当院の治験管理室には院内で実施される臨床研究の質の確保を目的とする支援機能<sup>1)</sup>や、製造販売後調査への支援、さらには受託研究費の管理まで求められている。本稿では、治験管理室を開設し4年が経過した時点でのこれからの課題と今後の展望について述べたいと思う。

**Key words**: 治験, 臨床研究, 製造販売後調査, CRC

---

# 経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）の観察時に胃粘膜がさけた経験 ～高齢者 PEG における注意点～

那覇市立病院 外科

長濱正吉，鹿川大二郎，赤嶺健吏，新里千明，高宮城陽栄，知念順樹，小野亮子，  
真栄城兼誉，金城 泉，宮国孝男，宮里 浩，友利寛文，山里將仁，大城健誠

---

## 要 旨

経皮内視鏡的胃瘻造設術（以下、PEG と略す）は食事摂取不能例や繰り返す誤嚥性肺炎例に対する手技として普及している。今回私たちは PEG 施行時に内視鏡操作によると思われる胃粘膜裂傷例を経験した。高齢者内視鏡検査における留意点を示唆していると思われるため報告する。症例は 70 歳代，女性。既往歴には頸椎症性脊髄症・変形性膝関節症・高血圧・認知症，などがあつた。2014 年 3 月に経口摂取困難（経管栄養中）で近医より PEG 目的で当科紹介となつた。腹部は平坦・軟で手術痕はなく，抗凝固薬や抗血小板薬の内服もなかつた。4 月上旬に PEG 目的で（経口）上部消化管内視鏡を施行した。十二指腸までの通常観察終了後，PEG 施行部決定時に胃体下部から前庭部小彎に縦走する粘膜裂創が判明した。バイタル・腹部理学所見の変化がないことを確認し速やかに PEG を中止した。絶食・薬物治療とし 9 日後に一旦転院とした。6 月に再入院し（細径）経鼻内視鏡で PEG を行つた。胃粘膜裂創部は癒痕化していた。高齢者の PEG では胃粘膜などの脆弱化が予想されるためコシの軟らかい細径内視鏡の使用や愛護的な内視鏡操作を行うことが肝要だと思われた。

---

**Key words**: PEG, 胃粘膜裂傷, 高齢者, 細径内視鏡

## 眼底所見が診断の契機となった非典型猫ひっかき病の2例

那覇市立病院 小児科<sup>1)</sup>,眼科<sup>2)</sup>

徳永孝史<sup>1)</sup>, 渡久地鈴香<sup>1)</sup>, 島袋美起子<sup>1)</sup>, 古波蔵都秋<sup>1)</sup>, 今給黎 亮<sup>1)</sup>, 上原朋子<sup>1)</sup>,  
平山良道<sup>1)</sup>, 伊波 徹<sup>1)</sup>, 知念正夫<sup>1)</sup>, 屋良朝雄<sup>1)</sup>, 早坂香恵<sup>2)</sup>

### 要 旨

猫ひっかき病（以下 CSD : cat scratch disease）は、典型例では受傷部位の発赤・腫脹、局所リンパ節腫脹や発熱を示すが、中枢神経症状や眼病変のみを示す非典型例の報告も多く、その初期診断は困難とされる。今回我々は、眼底所見が不明熱診断の契機となった非典型 CSD の2例を経験したので報告する。

【症例1】11歳女児。10日間続く発熱を主訴に受診した。抗菌薬 Cefotaxime, Panipenem/Betamipron, Clarithromycin 投与で解熱しなかった。眼底検査で網膜視神経炎を認め、Prednisolone 1mg/kg/day 内服を開始し、眼底所見の改善に加えて、速やかに解熱も得られた。抗 Bartonella. henselae IgG 1024倍以上, IgM 160倍であった。【症例2】12歳男児。発熱5日目に受診し、抗菌薬内服するも解熱せず、発熱16日目に入院した。猫との接触歴あり。眼底検査で網膜ぶどう膜炎を認めた。抗菌薬 Tosufloxacin 内服し速やかに解熱した。抗 B. henselae IgG 1024倍以上, IgM 360倍以上であった。【まとめ】不明熱の原因として非典型 CSD の診断に、眼底検査が有用であった。

**Key words:** 猫ひっかき病 (CSD), 非典型 CSD, 眼底検査

## 肥厚性硬膜炎を合併した多発性骨髄腫

那覇市立病院 内科  
内原潤之介, 新垣 均

### 要 旨

症例は 73 歳女性。持続する頭痛を主訴に当院神経内科受診。頭部 MRI 検査にて硬膜の広範囲にわたる肥厚を認め、肥厚性硬膜炎が疑われた。血液検査にて高蛋白血症とグロブリン分画で IgA の単一的な増加が見られ、血清・尿蛋白免疫電気泳動にて  $\kappa$  型 M 蛋白検出。骨髄検査で骨髄腫細胞の出現が認められた事から、症候性多発性骨髄腫、IgA- $\kappa$  型と診断。肥厚性硬膜炎に対して神経内科でステロイドパルス療法を施行。引き続きプレドニン内服へ切り替え、症状を観察しながら徐々に漸減・維持。多発性骨髄腫に対してボルテゾミブ単剤で治療を開始。血液検査にて TP や IgA、 $\beta$ 2-MG は速やかに低下。ボルテゾミブ投与 2 コース施行後の頭部 MRI で硬膜肥厚像は縮小。頭痛も消失し、ADL の改善も見られた。肥厚性硬膜炎は感染症や悪性腫瘍、膠原病等様々な原因で硬膜が肥厚するまれな疾患であり、診断は臨床症状と画像所見でなされる。臨床症状は頭痛が最も頻度の高く、画像所見は MRI による肥厚した硬膜の造影所見の検出が最も鋭敏な所見である。基礎疾患を有する例も報告されているが、多くの症例は基礎疾患が明らかではない特発性脳・脊髄硬膜炎とされている。自己免疫性血管炎等膠原病に合併する症例の報告もあるが、血液疾患に合併する報告はまれであり、その多くが悪性リンパ腫に併発するものであった。本症例のように多発性骨髄腫に合併した症例報告は現時点では見られなかったため、今回報告する。

**Key words:** 肥厚性硬膜炎、多発性骨髄腫